



## 私がプラネタリウム解説者になったいきさつ

農学部を卒業して念願の理科教師になった私ですが、得意の生物だけではなく、化学や地学の分野も担当することになり（嬉しくて）泣きそうになっていました。地学の中でも天文の分野は、奥が深く、おざなりな授業では生徒たちは満足しません。そこで通い始めたのが、今はなき渋谷の五島プラネタリウムです。そこでは、天文学のあらゆる分野の解説がたっぷり聞けました。解説者の話術も授業をする上でとても参考になりました。



五島プラネタリウムのコンソールから見た Zeiss Model IV (1999年12月の貸切投影時に撮影)

教師としてはそれでよかったですのですが、機械好きな性分から、別の興味がかき立てられたのです。それは、ドームの中心にある、ドイツ製の大きな投影機 (Zeiss Model IV) です。黒く妖艶な恒星球。それを支える惑星棚の中に埋め込まれた歯車の精緻な機構。ゆっくり回転する日周・緯度・歳差の三つの運動軸。レトロに映る星座絵、座標線。それらを操る秘密基地の中核のようなコンソール。そこに並ぶダイヤルとスイッチ。記されたドイツ語の表示。ドームにはやさしくあたたかい星空。非日常感と没入感。私はまるで魔法（呪い？）をかけられたように、繰り返し投影を見るようになりました。

その後、自ら企画したイベント投影、科学館や天文台でのボランティア、天体写真教室のアシスタントなどを経験し、知らず知らずのうちに解説者としての修行を積みました。こうして、私を虜にしたプラネタリウムとの永遠の日々は始まり、今にいたっています。

2022年10月28日記 (解説員：齊藤美和)